

強制連結法による 大学生のプレゼンテーション技術強化に関する授業実践

黒川 マキ^{*1} 林 徳治^{*2}

【概要】 筆者（黒川）が担当する情報処理演習の授業実践について報告した。授業では、プレゼンテーションソフト（PowerPoint）による教材作成技術の習得、各自作成した教材を用いて表現伝達能力の育成をめざしたプレゼンテーション技術（計画・実施・評価）の習得をねらいとした。プレゼンテーションの計画（内容・構成）では、自己の考えや展開を論理的に設計する手法として「強制連結法」を取り入れ、大学生の創造力や論理的思考の育成やわかりやすい表現伝達技術の習得をめざした。

【キーワード】 プレゼンテーション、強制連結法

1. はじめに

筆者（黒川）が大阪学院大学で担当する「情報処理演習Ⅰ」の授業では、プレゼンテーションソフトとして PowerPoint の基本操作の習得および情報伝達のためのプレゼンテーションの計画・実施・評価について習得し、演習を通して効果的なプレゼンテーション技術を習得することを目標としている。過去の筆者の授業経験より、授業の前半でソフトの操作習得に興味をもって取り組んでいた学生が、各自のプレゼンテーションの実施を控えた後半では、計画段階で十分な検討をしていなかったため作業が行き詰まり思うように進まなかったり、良い発想が得られず友人の意見に左右されて独自性が失われたりするものが多々見受けられた。

そこで、本授業ではプレゼンテーションの計画段階において、各自の既存スキーマを外化し論理的思考に基づいた内容を構成する手法として強制連結法（林，2002）を取り入れた。

2. 演習の内容・方法

強制連結法を利用したプレゼンテーション演習は、各クラス2グループに分け、1グループ10名前後として2回実施した。プレゼンテーションの評価は、言語、非言語（言語関連）、非言語（その他）、メディア利用、理解度、関心度、定着度の7項目について聴き手により行った。図1にプレゼンテーション演習風景を示す。

・対象者

大阪学院大学平成16年度前期「情報処理演習Ⅰ」の受講者1～4年生98名（3クラス）

・日時

〔1回目〕平成16年6月23・24日

〔2回目〕平成16年7月7・8日

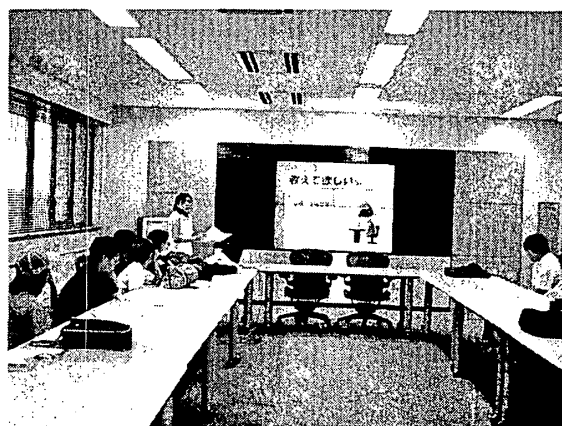


図1 プレゼンテーション演習風景

1回目のプレゼンテーションは、発端部に「近未来の携帯電話」、帰結部に「豊かな生活」を設定し、学生個々の発想や連想で両単語を結びつけるものとした。強制連結法シートを作成するにあたり学生へは次の点について助言した。

- ・新しい携帯電話の機能について考える
「携帯でこんなことができたならなあ…」
- ・実現可能・不可能は問題としない
- ・新しい機能が社会でどのように活かされているのか具体的に説明する

^{*1} KUROKAWA, Maki : 大阪学院大学

e-mail=makkie@oak.ocn.ne.jp

^{*2} HAYASHI, Tokuji : 山口大学教育学部

e-mail=hayashi9@yamaguchi-u.ac.jp

・発表一人5～10分、提示スライド6～10枚

「豊かな生活」とは、捉え方によって気持ちのゆとりや充実など精神面、金銭など経済面での解釈が包括されるが、学生各自の考えに一任した。学生による1回目の強制連結法シートの作成例を図2に示す。

2回目のプレゼンテーションは、発端部に「小学生」（聴き手である対象者）、帰結部に「未来の携帯電話のメリット・デメリット」（学習目標）を設定した。

1回目のプレゼンテーションは、「近未来の携帯電話」を始まりとして、個々の思いつく既有スキーマを外化し、「豊かな生活」に到達できるよう各自の考えを論理的に連結していくことをめざした。

2回目のプレゼンテーションでは、「伝える＝聴き手が存在する」ことを学生に知らせ、聴き手を明確にした上で対象者のレディネスを意識した伝達行為が行えるようめざした。そこで発端部には「小学生」を設定した。強制連結法を作成するにあたり学生へは次の点について助言した。

- ・1回目と同様に新しい携帯電話の機能について考える（1回目と同じ機能でもよい）
- ・小学生のレディネス、興味・関心を配慮する
- ・携帯電話の利点（光）だけでなく欠点（影）についても取り上げる
- ・発表一人5～10分、提示スライド6～10枚
- ・学生による2回目の強制連結法シートの作成例を図3に示す。

3. 考察

図2、図3に学生が2回のプレゼンテーションのために作成した強制連結法シートの例を示す。1回目のプレゼンテーション（図2）では、聴き手を意識していないため、自らが望む携帯電話の機能だけを取り上げた主体的な展開となっている。しかし、聴き手を明確にした2回目のプレゼンテーション（図3）では、対象者としての「小学生」を強く意識した客観的な展開となっていることが明らかである。小学生のレディネスや興味・関心事項に配慮し、最も身近な学校での会話や遊びなど楽しみについて触れ、宿題や塾などの話題から携帯電話の機能へと展開していった。

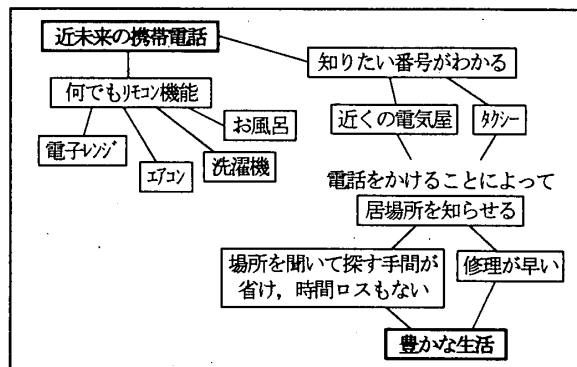


図2 強制連結法シートの作成例
(1回目、経営科学部2年女)

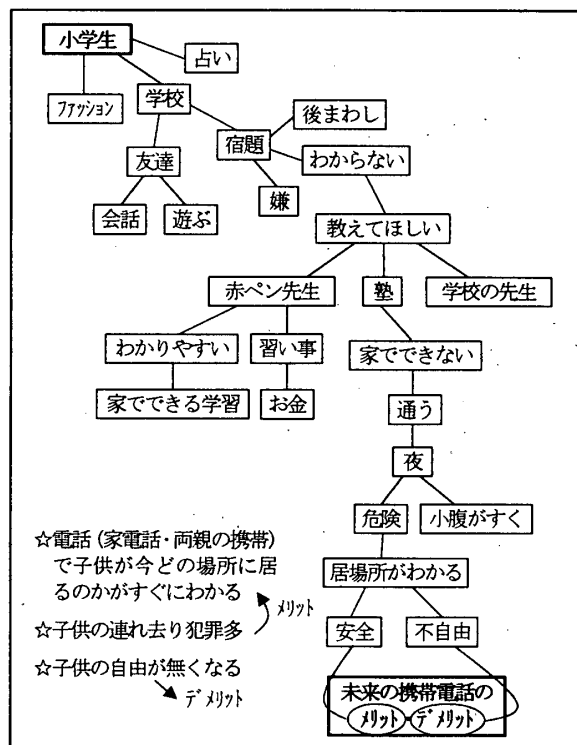


図3 強制連結法シートの作成例
(2回目、経営科学部2年女)

これまで、発想法として概念地図法やKJ法などさまざまな手法が開発されてきた。強制連結法は、同様に発想法として位置づけることができる。筆者は、本手法がプレゼンテーション技術の習得を図ると共に、主題を含めながらも対象者を強く意識したプレゼンテーションの展開が図れる点で非常に意義あるものと考えている。

筆者は、今後も継続して強制連結法に取り組み、本手法の有用性や汎用性についてさらに検証していきたい。

【参考文献】

- 1) 林徳治・宮田仁：『情報教育の理論と実践』，実教出版，2002，p.78